

## [論説] 伊勢神宮外宮の被害からみた康安元年の地震

三重県\* 奥野 真行

奥野 香里

The 1361 Koan earthquake as seen from the damage of Ise Grand Shrine Geku

Naoyuki OKUNO

Mie Prefectural Government, 371, Ido-cho, Kumano, Mie 519-4324, Japan

Kaori OKUNO

472-1, Ueji-cho, Ise, Mie 516-0051, Japan

The existence of Tokai earthquake paired with the 1361 (the first year of Koan, on 24th June in Lunar calendar) Nankai earthquake has not made clear so far. We have investigated the occurrence pattern of 1361 Tokai and Nankai earthquake from historical materials of Ise Grand Shrine. “Mibuke Monjo” includes the letter from Tadato Ozuki, who was the head of Mibu family. That letter shows that a certain earthquake, in the same month when the 1361 Nankai earthquake had occurred, had damaged to ‘Ontsukabashira’ of Ise Grand Shrine Geku ‘Shoden’. The other letter requesting ‘Tasukegi’ from Tadanao, who was the Chief Priest of Ise Grand Shrine, indicates that the damage of Geku ‘Shoden’ was so serious, and ‘Shinnomihashira’ and ‘Onkabeita’ were damaged by that earthquake. Those must be substantial evidences that Tokai and Nankai earthquake occurred in the same month.

Keywords: Koan Tokai earthquake, Ise Grand Shrine Geku, Tasukegi.

### § 1. はじめに

康安元年六月二十四日(1361年7月26日)に発生した地震は、近畿地方や四国の太平洋側など広範囲に大きな影響をもたらした地震として知られている(以下「康安南海地震」という)。当時書かれた史料の記述内容などをもとに、これまで多くの研究によって、各地域の地震当日の揺れや津波の状況が明らかにされてきた。

本論では、康安元年六月の地震による伊勢神宮外宮の被害に関する記述から、康安南海地震と対をなす東海地震(以下「康安東海地震」という)の存在可能性について述べるとともに、この時の被害と南海トラフ沿いで発生した他の地震による同神宮における被害との比較検討などを通して、康安元年六月の地震の実像について考察した。

### § 2. 康安元年の地震に関するこれまでの研究

ここではまず、康安元年の地震に関するこれまでの研究結果について整理し、そこから見いだされる現状での課題について述べる。

#### 2.1 康安南海地震の存在とその被害の概要

皆川(1984)によると、康安元年六月当時書かれて

いた日記として、『愚管記(後深心院関白記)』(関白左大臣近衛道嗣の日記、以下「愚管記」という。)、『忠光卿記』(参議柳原忠光の日記)、『後愚昧記』(内大臣三條公忠の日記)が挙げられる。また、古代中世地震史料研究会(2009)による[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)では、以下 2.2 において述べる康安元年六月二十一日から二十四日までの間に発生した地震に関する記述がある史料として、史料等級Aの基本史料(同データベースにおいて、「古代・中世に発生した地震・噴火について記述のある同時代の記録・文書または古代・中世の編纂物で根拠のある記録等に基づいて作成されたと判断されるもの」と位置づけられている史料)が8史料、史料等級Bの参考史料(同データベースにおいて、「おおむね江戸時代以前に作成された記録・文書・典籍で古代・中世の地震・噴火について言及しており、適切な史料批判を行うことによって、研究に活用できると判断されるもの」と位置づけられている史料)が24史料収録されている。基本史料には、先に述べた三つの日記のほか、『嘉元記』(法隆寺の寺僧らが書き継いだ記録)や、『東宝記』(東寺の総合的寺誌)が含まれており、参考史料の中には、軍記物語の『太平記』なども含まれている。

\* 〒519-4324 三重県熊野市井戸町 371  
電子メール: okunon00 @ pref.mie.jp

これらの史料のうち、当時書かれたものの大半は、当時社会の中心であった京都の公家や、近畿地方の寺社の僧侶などをその筆者とするものであり、地震による各地の動静に関する記述があるものについても、その記述範囲は、近畿地方に集中している。

山本・萩原(1995)は、『後愚昧記』、『愚管記』、『嘉元記』、『太平記』などの内容から、京都、大和、河内、摂津、紀伊、四国東海岸、土佐の各地の状況について述べた上で、京都から熊野まで縦断して建造物を倒壊させた地震動や、大阪湾全般、紀伊半島南岸、四国東岸及び南岸に押し寄せた津波から、近畿・四国に甚大な被害の生じた地震であったとしている。

矢田(2009)は、当時の確実な史料である『後愚昧記』、『忠光卿記』、『愚管記』の記事を検討し、京都や摂津天王寺、紀州熊野三山における地震動や被害の状況を紹介している。さらに、『嘉元記』や、『太平記』の記事から、摂津難波浦の津波被害の状況を、『太平記』の記事から、阿波由岐湊の津波被害の状況を紹介している。

石橋(2014)は、先に述べた基本史料である、『愚管記』、『後愚昧記』、『忠光卿記』、『嘉元記』、『東宝記』や、軍記物語の『太平記』の記述内容から、京都、奈良、摂津天王寺、紀伊半島南部の熊野三山、阿波由岐湊など、各地の地震動や津波、被害の状況について紹介し、関連するこれまでの研究結果についても言及した上で、このような地震動と津波をもたらした地震が、紀伊水道沖～四国沖を震源域とする南海トラフ巨大地震であったことは確実であるとしている。

## 2.2 対をなす康安東海地震の存在

康安南海地震と対をなす康安東海地震の存在について検討した研究として、石橋氏による一連の研究が上げられる。

石橋(1998)は、『愚管記』や、『後愚昧記』の次のような京都での揺れや熊野地方での被害記事に注目し、康安南海地震が発生した二～三日前に東海地震が発生した可能性が高いことを指摘している。さらに、石橋(2002)は、この二日前と三日前の地震の特徴を比較し、康安南海地震の二日前(六月二十二日)の地震が東海地震であったとしている。

### 『愚管記』の記述内容

「伝聞、去月廿二日同廿四日大地震之時、熊野社頭并假殿以下、三山岩屋以下秘所秘木秘石等、悉破滅(後略)」

### 『後愚昧記』の記述内容

六月廿一日「酉刻地大震、近来更無如此之事、消肝了」

六月廿二日「卯刻地又大震、如昨夕、連日大動先代未聞事也」

六月廿三日「今日又度々地動、不及昨日・一昨日兩度」

六月廿四日「今曉寅刻卯歟、又大地震、眞實消魂了、如此連日大震、其例何年候哉」

一方、地質学的手法や考古学的手法を用いた近年のいくつかの研究からは、次のような成果が提示されている。

寒川(2007)は、愛知県一宮市内での遺跡調査で発見された噴砂の年代から、康安南海地震に対応する東海地震存在の可能性について指摘している。

藤原・他(2006, 2007, 2009)は、駿河湾奥にある静岡県浮島ヶ原の湿地堆積物を調査して、層相の急激な変化を見出し、その変化は、湿地の地震沈降に由来する可能性があることを指摘している。そして、その地震沈降が発生した時期の一つは、14世紀中頃であり、康安元年(1361年)に南海トラフで発生した海溝型地震と時期が近いとしている。

宍倉・他(2008)は、紀伊半島南東部沿岸に分布する生物遺骸群集の高度、構造、年代から、400～600年に一回の割合で起こる連動型地震に伴う大きい隆起イベントを見だし、最新の連動型地震が宝永地震(1707年)であるとともに、その一つ前の南海トラフでの連動型地震の候補として、康安元年(1361年)の地震の可能性を論じている。

## 2.3 これまでの研究成果から見いだされる課題

以上のように、地質学的手法や考古学的手法を用いた複数の研究からは、康安東海地震の存在が示唆されている。

しかし、現時点で東海地方の震害や津波の記録は知られておらず、康安元年六月の地震の震源域が東方にどこまで延びていたかは史料からは不明であるとされる[石橋(2014)]。山本・萩原(1995)は、康安元年六月の地震による伊勢湾以東の被害程度を推測する上で、史料面での制約があることを指摘している。

これまでに知られている康安元年六月の地震による被害記事のうち、最も東に位置するのは、石橋(1998)及び石橋(2002)が、康安東海地震が存在した根拠の一つとしている、『愚管記』に記載の熊野三山における被害状況であるが、一方、寒川(2007)は、この熊野三山の被害を康安南海地震によるものとしている。

したがって、康安東海地震の存在をより確実なものとするためには、同地震が発生したと考えなければ、その被害を説明することが難しい地域、具体的には、熊野三山よりもさらに東側の地域での被害記事の発見が必要不可欠である。

### § 3. 伊勢神宮関連史料における康安元年の地震に関する記述

そこで、本論では、伊勢神宮の存在に着目した。

ここでは、伊勢神宮関連史料の中から、今回発見した康安元年の地震に関する記事について紹介し、その内容から考えられる伊勢神宮外宮の被害状況について検討する。検討に用いた史料は、『壬生家文書』である。

#### 3.1 伊勢神宮に着目する理由

伊勢神宮に着目した理由としては、主に次の三つがあげられる。

- (1) 千数百年以上にわたる長い歴史を有していること。それは、原則として二十年に一度行われる式年遷宮に象徴される。第一回の式年遷宮は、内宮(皇大神宮)(以下「伊勢神宮内宮」という)は持統四年(690年)、外宮(豊受大神宮)(以下「伊勢神宮外宮」という)は持統六年(692年)であり、以後、伊勢神宮内宮では、寛正三年(1462年)から天正十三年(1585年)までの間、伊勢神宮外宮では、永享六年(1434年)から永禄六年(1563年)までの間を除いて現在まで継続している[西垣(1979)、神宮司廳編(2005)]。なお、本論で検討対象としている康安元年の前後の式年遷宮は、伊勢神宮内宮が康永二年(1343年)と貞治三年(1364年)、伊勢神宮外宮が貞和元年(1345年)と康暦二年(1380年)に行われている。
- (2) 伊勢神宮は、伊勢湾沿岸から数km以上内陸にあり、過去の南海トラフ地震に伴う津波による史料の流失もなく、戦乱等の影響も比較的受けていないと考えられる。
- (3) 宝永四年(1707年)の宝永地震や嘉永七年(1854年)の安政東海地震の際、伊勢神宮外宮がある伊勢市(当時は山田)では、震度6程度であったと推定されており[例えば、宇佐美・大和探査技術株式会社(1994)、松浦・他(2011)、宇佐美・他(2013)、石橋(2014)]、康安東海地震が発生していれば、何らかの記録が伊勢神宮に残存している可能性があると考えられる。

#### 3.2 『壬生家文書』における記述内容

『壬生家文書』は、平安後期以降、官務を世襲独占してきた小槻氏の壬生家が保管し、伝来してきた文書群である[橋本(1992)、飯倉(1992)]。その中に康安元年伊勢神宮外宮の心御柱朽損等に関する祭主大中臣忠直の注進状や小槻匡遠書状等の写しが収められている。宮内庁書陵部(1985)によれば、これらの内容は『神宮文書』と外題のある仮表紙が付された二巻のうちの一巻で、江戸時代の写しであり、4.1で述べる神宮文庫にも同じ内容の文書(神宮文庫所蔵4408号本、2冊)が所蔵されている。

南北朝時代の官務壬生家の当主であった小槻匡遠の康安元年八月三日付け書状の写しの中には、次のような記述がある(以下「記述(A)」という。).

[記述(A)]

「依去六月地震、心御柱傾倚、御束柱顛倒以下事、邂逅之重事、就先規尤一有嚴重御沙汰之处、今依以前御飭拔落事、奉飭替者、則可奉直傾倚分坎、然者今度傾倚顛倒、為希代之重事之处」

祭主大中臣忠直の注進状は、「外宮心柱傾倚、正殿御壁板抜懸、御束柱顛倒間事」が表題となっており、文書の日付は、康安元年八月十三日付けである。注進は、「正殿奉差扶木永久例委可注進由事」など、五箇条から構成されている。

「正殿奉差扶木永久例委可注進由事」の条には、次のような記述がある(以下「記述(B)」という。).

[記述(B)]

「一、正殿奉差扶木永久例委可注進由事

此条、永久四年六月晦日、豊受宮正殿依傾倚奉差扶畢、是今年造替御遷宮也、仍不能造立仮殿之間、任嘉保例所行也、謂嘉保例者、嘉保二年、豊受大神宮正殿壁柱十本之内、九本根朽損、西方御棟持柱根同前、仍指北方七八寸許傾倚、注進子細之处、明年者廿年一度御遷宮年也者、可建立仮殿之宮地者、奉造立新宮已畢、仍任長曆四年例可勤行之由、八月十四日被下 宣旨、同十月廿一日 宣旨云、十一月二日奉渡御体於御膳殿者、同十月廿八日 宣旨云、件遷御事、先被行御卜之後、可有御遷宮、十二月五日 宣旨云、卜筮之趣共以不吉、不可有遷御云々、仍被旨<止>畢、而相待正殿遷宮期之間、尚依有事危、任宣旨、宮司造進、請材木奉差四方扶畢、此外仁安以下度々例多之矣」(<>は傍注)

#### 3.3 記述内容から考えられる伊勢神宮外宮の被害状況

記述(A)と、祭主大中臣忠直の注進状の表題には、伊勢神宮外宮正殿に関する三つの被害の内容が含まれている。

まず一つは、「心御柱(心柱)が傾倚」したことである。「心御柱(しんのみはしら)」とは、正殿の床の中心にあたる地点の地中に立てられる柱のことで、正殿の強度には影響しない。しかし、それは神聖化された存在であるといわれており、神宮司庁(1912、1928)によれば、「萬一異状ある時は上奏の後之を整理し奉り、又假殿遷宮を行ひて修繕を行ひし事もありき。」とされている。

あと二つは、「御壁板が抜け懸け」、「御束柱が顛倒」したことである。「御壁板」とは、福山(1976)や、伊勢神宮ウェブサイトの記載から、正殿の十本の壁柱

の間をつなぐ壁の板である。「御束柱」とは、福山(1976)による神宮正殿などの建築図面における記載から、地面から鉛直方向に立ち上がり、正殿の床を支える柱の部分に相当する。「康安元年六月の地震」により、伊勢神宮外宮正殿の本体に大きな被害が生じていたことがわかる。

記述(B)には、当時の伊勢神宮外宮の状況をさらうかがい知ることのできるキーワードが含まれている。「扶木(たすけぎ)」というキーワードである。

「扶木」とは、過去の先例の内容から、伊勢神宮外宮正殿が何らかの原因で傾倚した際、同正殿に柱を差し挟むことによって支え、さらなる危険を回避するために行われた応急的な措置であると考えられる。

記述(B)でとり上げられているのは、永久四年(1116年)に行われた「扶木」の先例である。このときの状況を、記述(B)と、福山(1976)や神宮司廳編(2005)が引用している『伊勢勅使部類記』を用いて列記すると、次のようになる。

- ・ 永久四年五月、伊勢神宮外宮正殿の東西棟持柱や壁柱がそれぞれ北方に傾倚していることが発見された。
- ・ 本来であれば、仮殿遷宮を行い、損傷した正殿の修理を行うべきところ、その年(永久四年)の九月には、二十年に一度の式年遷宮(第二十三回式年遷宮)を控えていた。
- ・ 嘉保二年(1095年)、豊受大神宮(伊勢神宮外宮)正殿の壁柱十本のうちの九本や、西方の棟持柱が朽損したことにより、正殿が傾倚するという事態が発生したが、永長二年(1097年)の九月に式年遷宮(第二十二回式年遷宮)を控えており、仮殿を建立すべき場所は、すでに新宮の建立地となっていたため、正殿の四方に扶木を差して、式年遷宮の時を待った。
- ・ 永久四年六月晦日(三十日)、嘉保の先例に任せて、正殿に扶木を差して、(約三か月後に行われる)式年遷宮の時を待った。

永久四年に伊勢神宮外宮正殿が傾倚した際、同様の状況に陥った嘉保の例が先例として用いられたのと同様に、永久四年の先例が、康安元年八月に書かれた文書にとりあげられていることは、このとき、伊勢神宮外宮正殿が、記述(A)にあるような具体的な箇所損傷を受けただけでなく、過去と同様な状況、すなわち傾倚するような状況に陥っていた可能性が非常に高いと考えられる。

#### § 4. 伊勢神宮外宮の被害と康安元年六月の地震の実像

§ 3における検討を踏まえて、康安元年六月の伊勢神宮外宮の被害は、どのような地震によってもたらされたのかについて、次の三つの観点から検討を行った。

- (1) 伊勢神宮外宮の被害からみた外力(地震動)の大きさ
- (2) 伊勢神宮外宮に被害をもたらした地震の震源像
- (3) 伊勢神宮外宮に被害をもたらした「康安元年六月の地震」の時間軸上の位置づけ

#### 4.1 伊勢神宮外宮の被害からみた外力(地震動)の大きさ

三重県伊勢市にある伊勢神宮の文庫である、神宮文庫に所蔵されている伊勢神宮関連史料からは、過去のいくつかの南海トラフ地震の際に、伊勢神宮が受けた被害の様子を知ることができる。

ここではまず、最近の南海トラフ地震である、昭和十九年(1944年)の昭和東南海地震と宝永地震の際の伊勢神宮外宮の被害と、「康安元年六月の地震」の際のそれとを比較することによって、伊勢神宮外宮における「康安元年六月の地震」による地震動の大きさを評価することとした。

神宮司庁(1969)によれば、昭和東南海地震の際、伊勢神宮外宮の瑞垣一枚が外れている。瑞垣とは、正殿を中心に四重にめぐらされている垣根のうち、最も内側の垣根である[神宮司庁(1912, 1928)]。また、このとき、伊勢神宮内宮の中にある別宮である荒祭宮においても瑞垣一枚が外れている。

『外宮子良館日記』(神宮文庫所蔵4036号本, 229冊, 康暦二年~明治二年)には、宝永四年十月二十八日の記録として、「去四日大地震ノキ正殿ノ御階ノ初段 男柱在之一級之事 南方へ四五寸スサリ」とあり、宝永地震の地震動によって、正殿南面の御戸へ上がる御階(みはし)の初段が少々「退った(すさった)」ことを記している。

なお、伊勢神宮外宮の被害ではないが、神宮司廳編(2005)は、『長官守雅家牒』の記述から、安政東海地震によって、伊勢神宮内宮古殿西側の石垣などが崩壊したことを記している。

これらの南海トラフ地震の際の被害に比較して、『壬生家文書』に記されている伊勢神宮外宮正殿の被害は著しく大きい。その被害が大きくなった要因が、正殿の老朽化によるものかを判断するため、地震発生時の式年遷宮からの経過年数という観点から検討した。

3.1で述べたように、伊勢神宮では二十年に一度、式年遷宮が行われ、正殿を含む建物の建て替え(新調)が行われる。宇佐美(1982)が指摘しているように、式年遷宮が行われることによって、千年以上の長きにわたって、ほぼ同じ強度で、かつ同じ構造の建物が続いていることになる。南海トラフ地震直近の伊勢神宮外宮の式年遷宮の実施実績を見てみると、昭和東南海地震は、地震の十五年前の昭和四年(1929年, 第五十八回式年遷宮)、宝永地震は、地震の十八年前の元禄二年(1689年, 第四十六回式年遷宮)にそ

れぞれ行われている。一方、康安元年六月の地震の直近では、地震の十六年前の貞和元年(1345年)に第三十五回式年遷宮が、前回の式年遷宮から二十年が経過した時点で正常に行われており、南海トラフ地震発生時点での式年遷宮からの経過年数という点では、各地震間で大きな差はない。

したがって、康安元年六月の地震による伊勢神宮外宮正殿の被害の大きさは、正殿の老朽化が主要因となって生じたものとは考えにくく、宝永地震や昭和東南海地震時を上回る強震動が、伊勢神宮外宮を襲っていたと考えることが妥当である。

そして、このとき伊勢神宮外宮で推定される震度は、3.1 でとり上げた、これまでの研究により明らかになっている宝永地震及び安政東海地震時における、伊勢神宮外宮がある当時の山田の震度から判断すれば、石橋(2014)が述べている震度 5 を大きく上回っていた可能性がある。

#### 4.2 伊勢神宮外宮に被害をもたらした地震の震源像

次に、伊勢神宮外宮正殿の被害が、どのような震源を持つ地震によってもたらされたのかについて、現代の地震被害想定結果を用いて検討した。

三重県は、地域防災計画被害想定調査において、南海トラフ地震や、県内の主要活断層を震源とする地震それぞれについての地震動予測を行っている[三重県(2006)]。表1は、それらの想定地震ごとに、伊勢神宮外宮がある伊勢市において想定されている震度をまとめたものである。伊勢市に震度6弱以上の

揺れをもたらすのは、活断層を震源とする想定地震の中では一つもなく、東南海地震の単独発生モデルまたは東海・東南海・南海地震同時発生モデルの二つの場合に限られる。同じ南海トラフで発生する地震でも、南海地震単独発生の場合に想定される揺れは、震度4にとどまることがわかる。

このことから、伊勢神宮外宮正殿の被害は、康安東海地震または南海トラフでの連動型の巨大地震に伴う強震動によってもたらされた可能性が高い。

#### 4.3 伊勢神宮外宮に被害をもたらした「康安元年六月の地震」の時間軸上の位置づけ

伊勢神宮外宮正殿に被害をもたらした地震の発生時期に関して、『壬生家文書』の記述からは、石橋(2014)も指摘しているように、「去(康安元年)六月地震」とまでしかわからないが、石橋(1998, 2002)の指摘とは矛盾せず、康安東海地震と康安南海地震とが一月以内という極めて近接した間隔で発生していた可能性が非常に高い。また、古代中世地震史料研究会(2009)を用いて、康安元年六月の地震記録を調べてみると、同月前半に発生した地震記事は見当たらない。伊勢神宮外宮正殿に大きな被害をもたらすほどの地震動が、京都等で無感であり、記事に全く残らないとは考えにくいとすると、「去(康安元年)六月地震」は、その発生日付を特定することはできないが、石橋(1998, 2002)が指摘する地震と同一か、極めて近い時期に発生していた可能性がある。

表1 想定地震ごとの伊勢市における想定震度一覧

Table 1 List of the estimated seismic intensity in Ise city by each seismic source

想定地震	想定地震規模	伊勢市の想定震度
東海・東南海・南海地震	M8.7	震度6強
東海地震	M8.0	震度5弱
東南海地震	M8.1	震度6弱
南海地震	M8.4	震度4
養老-桑名-四日市断層帯	M7.8	震度4
養老-桑名断層帯	M7.4	震度4
鈴鹿東縁断層帯	M7.5	震度4
伊勢湾断層帯(伊勢湾断層帯主部)	M7.5	震度5弱
伊勢湾断層帯(白子-野間断層)	M7.0	震度5弱
伊勢湾断層帯(鈴鹿沖断層)	M6.7	震度4
布引山地東縁断層帯(西部)	M7.4	震度4
布引山地東縁断層帯(東部)	M7.6	震度5弱
頓宮断層	M7.3	震度4
木津川断層帯	M7.3	震度4
多気断層	M7.3	震度4

## § 5. まとめと残された課題

伊勢神宮関連史料における記述内容から、康安元年(1361年)六月に発生した康安南海地震と同じ月に、伊勢神宮外宮正殿に大きな被害を与えるような地震が発生していたことがわかった。その被害の状況から、康安東海地震が康安南海地震と時期を極めて近接して発生していた可能性が非常に高い。

今後の課題として、康安東海地震の存在をより確かなものとするためには、紀伊半島東部の沿岸地域において、当時の津波に関する史料記述を発見する必要がある。

最後に、南海トラフ地震の想定震源域内に位置し、同じ強度で、かつ同じ構造の建物が長きにわたって存在し続けている伊勢神宮は、宇佐美(1982)が指摘しているように、過去の南海トラフ地震を相互比較する上でのリトマス試験紙のような存在になり得ると考えられる。今回、安政東海地震の際の伊勢神宮外宮正殿の被害は明らかにすることはできなかったが、「康安元年六月の地震」による伊勢神宮外宮の被害は、宝永地震や昭和東南海地震によるそれを大きく上回るものであり、そのことから考えられる康安元年六月の一連の地震の実像や、南海トラフ地震の中でのこの地震の特異性について明らかにしていく必要がある。

## 謝辞

本稿の作成にあたって、査読者の方々、編集出版委員の西山昭仁氏から極めて有益なご意見をいただき、本稿の内容は大幅に改善されました。ここに記して深く感謝申し上げます。

対象地震：1361年東海地震、1361年南海地震

## 文献

- 藤原治・小松原純子・澤井祐紀, 2006, 静岡県浮島ヶ原の湿地堆積物に見られる層相変化と南海トラフ周辺の地震との関係(速報), 活断層・古地震研究報告, 6, 89-106.
- 藤原治・澤井祐紀・守田益宗・小松原純子・阿部恒平, 2007, 静岡県中部浮島ヶ原の完新統に記録された環境変動と地震沈降, 活断層・古地震研究報告, 7, 91-118.
- 藤原治・藤野滋弘・小松原純子・行谷佑一・澤井祐紀・守田益宗, 2009, 駿河湾北岸の湿地堆積物に見られる100-300年間隔の沈水イベントとプレート間地震との関係, 日本地質学会第116年学術大会講演要旨, O272.
- 福山敏男, 1976, 伊勢神宮の建築と歴史, 日本資料刊行会, 472pp.

- 橋本義彦, 1992, 壬生家, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第十三巻(まーも)』, 吉川弘文館, 457.
- 飯倉晴武, 1992, 壬生家文書, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第十三巻(まーも)』, 吉川弘文館, 458.
- 伊勢神宮ウェブサイト, 神宮についてー社殿の建築一, 最終閲覧日2016年10月27日, <http://www.isejingu.or.jp/about/architecture/index.html>.
- 石橋克彦, 1998, 1361年正平南海地震に対応する東海地震の推定, 日本地震学会講演予稿集1998年度秋季大会, 125.
- 石橋克彦, 2002, フィリピン海スラブ沈み込みの境界条件としての東海・南海巨大地震ー史料地震学による概要一, 京都大学防災研究所研究集会13K-7報告書, 1-9.
- 石橋克彦, 2014, 南海トラフ巨大地震ー歴史・科学・社会, 岩波書店, 205pp.
- 神宮司庁編, 1912, 神宮大綱, 神宮司庁, 324pp.
- 神宮司庁編, 1928, 神宮要綱, 神宮司庁, 754pp.
- 神宮司庁編, 1969, 神宮・明治百年史中巻, 神宮司庁文教部, 463pp.
- 神宮司廳編, 2005, 神宮史年表, 戎光祥出版, 305pp.
- 古代中世地震史料研究会, 2009, [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2016年5月4日, <http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/db/>.
- 宮内庁書陵部, 1985, 圖書寮叢刊 壬生家文書七, 宮内庁書陵部, 302pp.
- 松浦律子・中村操・唐鎌郁夫, 2011, 1707年宝永地震の新地震像(速報), 歴史地震, 26, 89-90.
- 三重県, 2006, 三重県地域防災計画被害想定調査結果(平成17年3月), 最終閲覧日2016年10月27日, <http://www.bosaimie.jp/mh800.html>.
- 皆川完一, 1984, 記録年表・記録目録, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第四巻(きーく)』, 吉川弘文館, 461-503.
- 西垣晴次, 1979, 伊勢神宮, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第一巻(あーい)』, 吉川弘文館, 585-588.
- 寒川旭, 2007, 地震の日本史ー大地は何を語るのか, 中央公論新社, 268pp.
- 宍倉正展・越後智雄・前李英明・石山達也, 2008, 紀伊半島南部沿岸に分布する隆起生物遺骸群集の高度と年代ー南海トラフ沿いの連動型地震の履歴復元一, 活断層・古地震研究報告, 8, 267-280.

- 宇佐美龍夫, 1982, 神宮と地震の歴史, 瑞垣, 128, 34-37.
- 宇佐美龍夫・大和探査技術株式会社, 1994, わが国の歴史地震の震度分布・等震度線図, 社団法人日本電気協会, 647pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 694pp.
- 矢田俊文, 2009, 中世の巨大地震, 吉川弘文館, 203pp.
- 山本武夫・萩原尊禮, 1995, 正平十六年(康安元年, 一三六一)六月二十四日前後の地震ー南海大地震, 震害と津波被害の検討, 萩原尊禮編著『古地震探求ー海洋地震へのアプローチ』, 東京大学出版会, 70-96.